

CeMI 気象防災支援・研究センター

News Letter

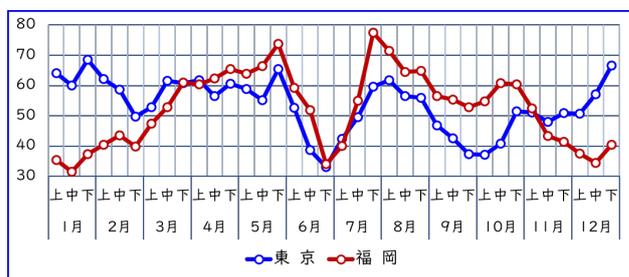
Contents

1. 五月晴れ
2. 五月の大雨 ～梅雨前の大雨にも注意～
3. お天気よもやま話 ～予報用語について



1 五月晴れ

広く知られているように五月晴れは旧暦の5月、現在の6月の梅雨時の晴れ間を指す言葉です。図は東京と福岡の旬別の日照時間の平年値を示したものです。5月下旬までは10日間で日照時間が60から70時間ありますが、6月に入ると日照時間は減少し、6月中旬から7月中旬にかけては昼間の時間が最も長い時期にも関わらず、日照時間は極端に少なくなります。梅雨の最盛期に当たり、雨が多くなり、日照時間が少ないこの時期の晴天は大変に貴重なことから、特に『五月晴れ』と呼ばれていました。ただ、梅雨期の晴れ間なので、気温や湿度は高くジメジメした感じで、時には蒸し暑さも加わる晴天です。一方、近年は新暦の5月の晴天を指すものとしても使われるようになりました。5月の頃の晴天は、大陸から移動してくる乾いた高気圧によってもたらされることが多く、湿度も低く、気温も20℃前後と過ごしやすく、梅雨期の晴天とは好対照の晴天と言



旬別の日照時間の平年値 [1991年~2020年]

えます。同じ五月晴れであっても全く異なる二つの晴天を指していることに気づきます。

他に『五月〔さつき〕』がつく言葉には、五月雨〔さみだれ〕や五月闇〔さつきやみ〕といったものがありますが、こちらはまさに梅雨の季節に相応しい言葉でしょう。

今から50年くらい前は、天気予報や報道の中で5月の晴天に五月晴れという言葉を使うと、苦情や間違いとの指摘があったといったことも耳にしました。

大小10冊を超える国語辞書で『五月晴れ』を調べてみました。版が古かった1冊を除いて全ての辞書で、表現に多少の違いはあるものの「旧暦5月、梅雨の頃の晴天」に加えて、「5月の晴天」も併記されていました。このうちの1冊には、「5月の晴天」の後に、注書きで「誤用の定着」とありました。また、NHKアナウンス室の編集した『間違いやすい日本語ハンドブック』にも「本来は旧暦5月の良い天気、梅雨の晴れ間のこと。」に加えて「現在は新暦5月の晴天も言う。」と記されています。誤用が定着し「お墨付き」を得てしまったことに、言葉のおもしろさを感じました。天気に関する言葉に限らず、言葉の意味は時代とともに変遷することがありますが、「ゲリラ雷雨」や「ゲリラ豪雨」といった言葉が辞書に掲載される時が来るのでしょうか。



2 五月の大雨 ～梅雨前の大雨にも注意～



市道長尾荒牧線

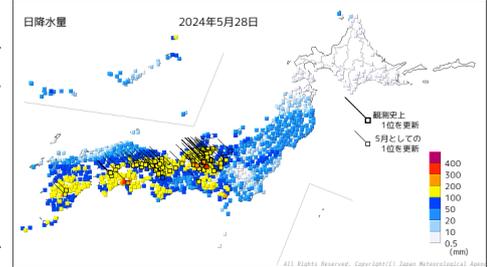
出典:令和6年8月,天神川氾濫災害調査委員会 調査報告書

2023年5月7日から8日にかけて、前線が西日本付近に停滞し、この前線上に発生した低気圧が近畿地方を通過したため、兵庫県の南部で大雨となりました。アメダス観測所の西宮では8日03時00分に24時間降水量が

189.5mmを記録し、5月の観測史上1位の記録を更新しました。この大雨で伊丹市を流れる天神川が堤防決壊し、浸水被害が発生しました。要因として、河川改修中であったことが挙げられます。5月中には河川改修を終わる予定であったと言われていいますので、梅雨入り前の大雨の可能性が少ない時期ということが前提での改修のはずだったのでしょうか。ちなみに、観測記録が100年以上ある神戸で見ると、24時間最大降水量は2024年5月28日の176.5ミリが5月としては最高です。ゴールデンウィーク明けの時期に24時間で200ミリ近くの大雨は想定外だったのでしょうか。

ところで、5月の終わりになると早い年では梅雨入りすることもあり、ぼちぼち大雨の可能性が高くなってきます。

2024年5月28日は、前線の停滞と低気圧の通過で、西日本から東日本の広い範囲で大雨となりました。図は5月28日の日降水量の分布図ですが、多くの地点で5月としての1位の記録を更新しています。ちなみに、前出の神戸もこの時が5月の記録となっています。なお、この時「線状降水帯による大雨の半日程度前からの呼びかけ」は、



地方単位から府県単位に絞り込んだ運用を5月28日に開始予定でしたが、1日早めて27日から運用開始しています。27日から28日にかけては、広い地域で、この呼びかけが発表されました。結果的に線状降水帯は発生しませんでした。広範囲に大雨となっています。線状降水帯は発生しなくても大雨にはなったということです。これらの二つの事例だけではありませんが、梅雨入り前の大雨事例は多くなっており、その地域も広範囲になっています。早め早めの大雨対策が必要になっているのでしょうか。

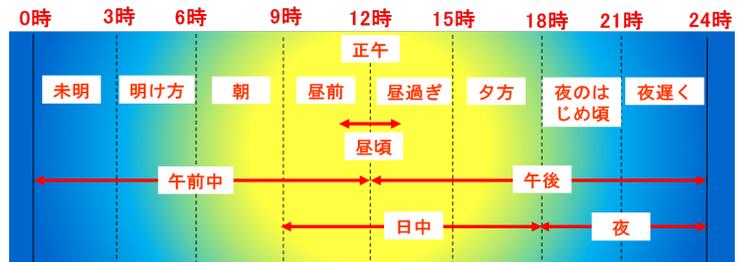
3 お天気よもやま話 ～予報用語について

天気予報等で使われている言葉の中には、言い回しが独特と感ぜられるものもあります。例えば「夜のはじめ頃」という言葉は、日常の会話ではなかなか使われない言葉ではないでしょうか。天気予報等で使われている言葉は、気象庁によって「予報用語」として定められています。

「時」や「(気圧や降水等の)気象の要素」等、多くの用語が次の四つの観点に基づいて定められています。一つ目は明確であること。情報を受けとった人に正しく意味が伝わるように、という観点ですね。ただし天気予報では、例えば「曇り時々雨」のように不確かさを含む情報も伝える必要があります。それらを表す用語には、一定のルールを決めています。二つ目は平易さ。専門的な用語は最小限にし、理解しやすい用語を選択しています。三つ目は聞き取りやすさ。日本語は文字で見ると一目瞭然でも、音で聞くと判別できない用語もあります。ラジオ等の音声情報として伝える時には大事な観点ですね。そして、四つ目は時代に適

合すること。言葉は時代とともに変化していきますから、皆さんの言語感覚とずれてしまわないようにします。これら四つの観点に報道機関等の意見も取り入れて予報用語を決めています。

下の図は時間帯を表す予報用語をまとめたものです。



先ほどの「夜のはじめ頃」は18時から21時の時間帯のことです。ちなみに「夕方」は15時から18時のこと。季節により、また地域や人により「夕方」と感じる時間帯は異なると思いますが、予報用語では一年中、全国どこでも「夕方」は15時から18時としています。



掲載内容へのご意見、そのほかサービスに関するご相談・ご要望等ございましたらお気軽にご連絡ください。

NPO法人 環境防災総合政策研究機構(CeMI)

気象防災支援・研究センター

〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22口ーヤル若葉105号
<http://www.npo-cemi.com/center.html>

☎ 03-3359-7971

☎ 03-3359-7987

✉ advisory@npo-cemi.com

